

林業・木質バイオマス発電の あるべき姿に関するissue(イシュー)

issue(イシュー):何を考え、論じるべきか

全国木材チップ工業連合会

燃料材を含む森林資源の持続的な利用について

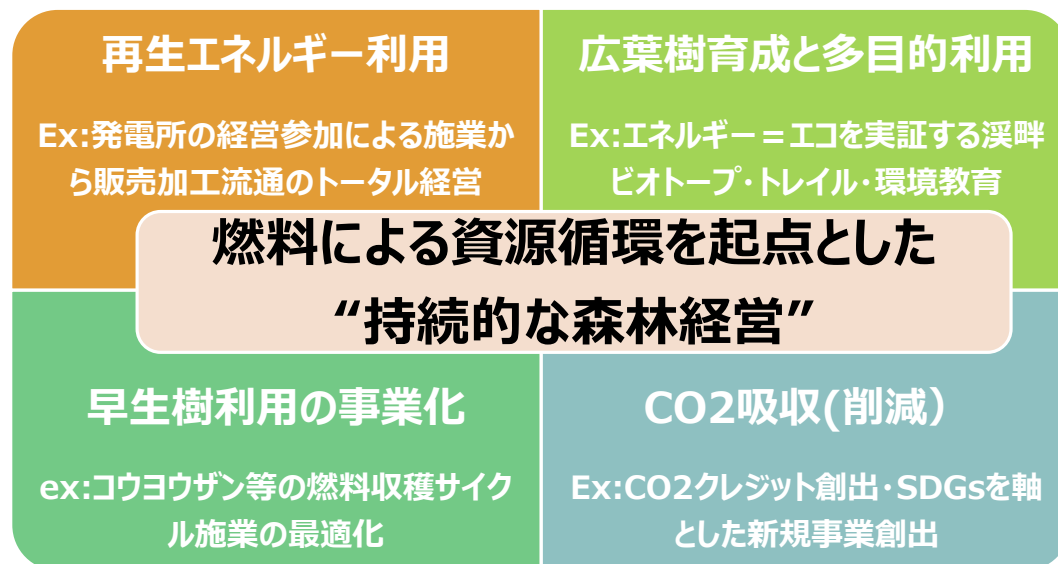
現状（課題）

- 皆伐とセットとされるべき再造林は燃料の安定供給には不可欠に。
- コウヨウザンに代表される早生樹による事業スパンの短期経営化の重要性UP
- 燃料材は現状の森林経営ではD材と呼ばれ、単純収支次第の生産動機にとどまっている

あるべき姿

- 今までの建築材用途を念頭に置いた“**マテリアル用途のため**”の森林経営だけでなく“**再生エネルギー創出のため**”の森林経営を新たな経営選択肢として確立し、森林経営スタイルの選択肢を増やすべき。

【イメージコンセプト：エネルギーの森（仮称）】



林業生産コスト低減と輸送コストの圧縮

現状（課題）

- 燃料材は現状の森林経営ではD材と呼ばれ、単純収支次第の生産動機にとどまっている⇒高コストではD材生産（枝葉根株含む）は不可能
- 枝葉根株の生産原価の大半は輸送コスト（円/t）で生産動機が働いていない
※実例：枝葉のみ輸送の場合 = 5,000円/ t 以上のケースも確認

あるべき姿

- D材生産単純収支を改善するためには、それが可能になる**路網のさらなる拡充**により搬出意欲を高める。
Ex: 林業専用道規格相当の路網は効果的があるが、設計施工管理のレベルが事業体主体ではなじまない⇒燃料集材作業道のような規格路網の拡充など
- 枝葉根株等の輸送コストを発電所調達コストと一体となって捉え、**施策・革新輸送技術の実証・開発・定着化**がされ、1段階上のカスケード利用の実現

需給双方の燃料としての品質（特に乾燥）の向上努力

現状（課題）

- 発電所の発電燃焼効率の大きなカギを握るのが、投入チップ段階の乾燥（含水率）であるが、供給側（集荷チップ化）・需要側（発電燃焼）双方において乾燥品質の維持管理技術に関しては未開発余地が大きいいため、適正な需給調整の大きなボトルネックになっている。

あるべき姿

- **土場レベル適用できる簡易な含水率低下（適正化）技術の開発と普及**を需要側での重要性を認知することにより、適正な需給調整と安定供給がされ、**調達価格を含んだ需給の最適化**により、双方経営の安定化
- **品質管理技術の定形化⇒調達価格の最適化** による収益向上分の最適化

地域を主眼に置いた熱利用の積極的推進

現状（課題）

- 日本においては、欧州先進事例のような中山間地域活性化につながる熱利用の普及が進んでいない。
 - ※原因の考察として
 - ・中山間地域は住宅密集しておらず不効率
 - ・個別暖房システムが普及しており、集中型は皆無

あるべき姿

- まちづくり、地方創生関連事業の早期計画段階から、**熱エネルギーの高効率利用を重要な基盤条件**として、利用推進を促進されるべき。